

真 生

第 四 卷 三 月 號

□ 然とこれに依らざるを得ない心となる。それが何の爲めかは知らない。只だ自づとさうなることが自分の本心の満足であるからである。

□ 一切を打任かす外に一切のすべもないのである。

□ 乍然私共はいつまでも此の心ばかりではあり得ない。そして如來無限の大悲の中に自然と自己の本心が養はれていつかは自分でも如來の聖旨にそむきたくないやうな心となりやがては如來の聖旨を我が聖旨として人にも之を示したくなつて來るのである。

□ 而して其の第一歩には自ら如來の使者として此土に生きやうとするのである。即ち如來の使命を果すべく日夜に聖旨宣傳の生活に立つ。

□ 乍然更に一步を進むなれば私共の生活は單に如來の使者としての生活でなく、直にそれが自分自身の使命ともなり又如來の心を心とする佛の生活として此の世の生活に顯れる。それは自分自身が直に佛として宇宙の理想を果たさうとするに至るのである。

□ 一つまでも如來にのみ任せきつて徒に慰安を求むる生活でも無く、亦如來の聖旨を傳ふる爲めの單なる使者としての人も無く、一切を佛としての生活ならしめる佛の自覺としての生活である。私共の眞實の生活は以上の中の何れであらうか。

□ 然に友よ、私共の眞實の生活は正に第三の自ら佛としての生活を眞に意義ある眞の生活に正に第三の自ら佛としての生活を。

念
 一四二一

つ 育 は 仰 信

目 次

● 信仰は育つ	冠 子
● 全一の生活	土屋 龍道
● 懺悔録(三七)	渡 阿 剛
● おも念佛よ	山口 常照
● 吾願便り	

▽人間には喰氣と色氣と風氣と及び氣の他何もない。▽時には戀を捨て、までもパンを争ひ、善悪人情を破つても金を争ふ。一体をれまでも生きてはならんものが何かあるのか知らん。だ、負けたくない、死にたくないから人を殺しても、人を弄してまでも勝りたい、負けの事であつて本當に生存の理由を認め、生存の意義からして泥棒も、金儲もしてゐる者が幾人あるか知らん。た、仕事なしに生きるが爲めに働き、反社会的に求め、相争つてゐるのに過ぎず、醜態として衆務に駆使されてゐるの下はあるまいか。

▽然しこれを本能的生存だと云つて了へばそれまで、あるが其根柢には何か知らぬ生き様びたいといふ本心の要求があるからこそ、時には人を殺してまでも自分が生きてたいのである。ただ其生きたいといふ願望を判然と認知して居らぬ丈りで、皆此の心のない者は一人もない。

▽此本心的要求を誰かおぼえて、その自己、眞に生きる上の眞實相として、金儲けも戀も空聞も一切を處理して行くのが宗教信仰である、即ち生活に統攝と歸結とを見出すのが信仰である。

▽管子は「君子は物に使はれず、物を使ふ」と云てゐるが、眞人は人生を窮厄弁にするものでなく、最高價值として其人生を活動させるものである。(冠)

□信仰に入てから二年も三年もその信念の上に何等の變化も増減をも生じないといふのは、一面喜ぶべき事でもあるが又一面悲しむべき事である。

□信仰も苗木と同じ事である、刻々に變化生長して數年後には似もつかぬ大木となつて了ふ、而し苗木そのものが無くなつて大木に變つたと云ふのではなく、苗木其儘が大木になつてゐるのである、滋味が甘味に更つたやうな一貫した生命が、常に信仰の上にも在る事は勿論である。

□佛に歸命すること愈々深ければ、愈々佛の本質を弘め、自己の本質を宏くする。初めには佛を信する必要もなかつたものが、一度如來を信するやうになつてから、信せず措かうとしても居れぬやうになつて来る、明けても佛、暮ても佛、最早如來様の手の届かぬ處はなく、何處まで逃げて行つてもお慈悲の領分である、佛と離れる事はどうしても出来なくなつて、完全に同一世界に住んで居ると云ふ實感に生きるやうになります。

□而しそれ丈で如來様と自分の關係が終るものではない。主人の店へ初め見習に入れた時は一にも主人、二にも主人で、主人なくしては何事も出来なかつたほど主人の存在は大であつたが、漸く側に居る事が長じて終にはいつとはなく、主人の實力を我身に體得して主人の代理を勤め、自分で仕事を捌いてゆける、即ち主人の力が我が内に生き、私のゐる事が同時に主人のゐる事になる、即ち主人と自分が眞に一となつた境致が来る。

□信仰の世界にも斯る即ち一境が終には来る、佛は最早拜むのではなくて體現そのものである。拜む必要がなくなるまで佛も拜まなくてはならぬ。眞に拜がまれ拜がむ讚嘆稱揚の悦びは實に爰に在る。

(冠 子)

全一の生活

土屋觀道

私は小さい時から君には忠、親には孝、如何なる場合にも人の爲めには身命を捨てても盡さねばならぬ、それが人間の道であり、それが人格ある人々の行いであると聞かれて、自分も之を喜び、人にも之を語ることを喜んだ。然に少しく長ずるに従つて世の中の人々はそんな人ばかりではないといふことに気がついた。而て又悉くが忠孝の實行者でもないと言ふことも判つて來た。しかもそういふ私の心の中にも亦必ずしも忠孝仁義の心ばかりではないと言ふことが發見せられ、時には反つて不忠不孝とさへ思はれる淺ましい心の起きるのを覺え、人に言ふことさへはばかるいやな心さへも其の奥底にあることを氣づくに至つた。それは無我主義に對する自我主義の反抗かも知れぬ。何が故に君に忠をすべきであるか、何が故に親に孝をすべきであるか、自分を捨て、まで忠孝をせねばならぬ理由がどこにある。報恩といふも其の限界は先方より受けし御恩の程度によるこちらの御恩は先方にはないか、それにまた報恩主義ならば恩なきものには何もせんでよいのであるか、危害を加へるほどの人々に對しても慈愛であるがよいではないか、さればとて身を殺して仁をなす古人の心が判らない。それでは自分は立行かぬ。それでも自分はやるべきであらうか、人は何故に自分の利益を計つては悪いのか、又何故に人の爲めのみすることがよいことであらう、之は封建時代の誤つた道德ではないか、それが強られた道德である。

今少しく自己の本心に満足の出來る道德はないものか。さればとて自分は忠孝を欲しないものではない、自分はどこまでも忠孝の人でありたい。乍然其の忠孝は人から強られた忠孝でなくて、心からなる忠孝の人でありたい。言いかゆれば自分自身に心の底から満足の出來る忠孝の心でありたい。そしてそれが自分の本心の望みであるとの根本的自覺から起る所のものでありたい。而て他人に對する一切の道もまた同様である。

然るに従來の道德はともすればせねばならぬの道德であり、上から下への強壓である。従つて君には忠親には孝、人には親切と云ふことも其の人の誰たるを問はず、さうせねばならぬ人の道として上から強いられるの感がある。乍然何故か人は自由を尊ぶ、従つて、かゝる強いられた道德は所謂束縛の生活となり自由を好む人類の本心は反て之等を厭であらう。従て之等の壓迫を脱したい心から、遂には誤て眞實の忠孝までも一がいに嫌な心になるのである。茲に於て私共は今少しく忠孝の道について眞に強られざる理由はないか、即ち自ら進んで盡すべき忠孝の道理はないか。若しあるとしたならば如何なる意味の道理であらう、忠孝の道を読むはよろしい、乍然それが私共に強られたものであつてはいけない、今少しくそれが私共の本心からの忠孝でありたい、心の中から湧出した自由と喜びのものでありたい。然るに舊き従來の道德は一つも之等の道理を説かぬ。たゞ之を説く人々があつたとしても多くは舊き形式の道德に過ぎずして、眞に自覺ある自由生活の道德でない。従て其の説や封建の思想に過ぎず、官權の力をかゝるか、群集の舊き思想の強壓に待つか、或は反つて對者をして反對の理由をさへ見出さしめる忠孝の説さへあるに至つては、私共の衷心より悲しまざるを得ない所である。

茲に於て私は考へる、今少しく眞實自由の道とはないか、之では全く自由なき奴隷の生活である。又下より上への盡すべき道徳であつて、上から下への盡すべき道徳がない、いつも弱者の道徳であつて、強者のなすべき人類への道がない、されば我等の望む道徳は眞の自由の道徳である、身命を屠ても惜まぬの眞の自由の生活である。強られざる自由の生活、自由の力、そこに永遠の平和と無限の向上とが輝くでないか。生より生へ、向上より向上へ、どこまでも伸び伸びした眞人の平和が望ましい。強られない道徳、それが私の望みであり願ひである。

乍然そんな道徳があるであらうか、私は確にそれがあると思ふ、而てそれは確に愛の心の道徳である。愛の外に眞の心の道徳はない、愛こそは實に道徳の根源である、愛あらば自ら君には忠、親には孝の道徳となる。愛なき所に眞に忠孝の心はない。かくいへば或る人は云ふかも知れぬ、愛なき人へも盡すのが人の盡すべき道ではないか愛するものへの道徳ならば、誰とて盡さないものどてはない、愛なき人へも盡すのが道である、單なる愛の道徳ならば愛なき人へは行へぬ、それでは道徳が普遍でない。

乍然それは私の言はふとする眞の心を壓えるの言方である。私の心はそんな心で云ふのではない、私の言ふとするところの愛なるものは一切を愛する眞の心である。親が子を思ふ愛の如く、すべてを許した愛の心である。正邪を問はず、貧富を論せず、其の罪をもとがめずして、其の人を善導に入れんとするの至愛である。茲に於て如何なる人も兄弟となり、同朋となる。君臣も一體となり、父子も同體となる。すべて聖愛の生活である。故に如何なる人へも愛せずにはおれない眞の自由の生活となる。君に對する忠も、親に對する孝も、人に對する一切の行爲までが之等に對する愛の現れである。従つて、自分

に害を加へる人も、自分に恨みを酬ゆる人もそれらはすべてが慈愛の中の人々となる。

乍然私共の生活は果してそれが出来るであらうか、愛なき人の生活が不忠不孝の生活となる。けれども私共の至愛がどうしたならば起るであらう。而も其の愛が中々に我等の心には起らない。然ば如何にして其の至愛ば起るであらう。愛の本源は何であらうか、至愛を起すべき道、果して如何、之が私の第一に來たる根本への考へである。然るに愛は自ら愛するものへと動く、而てそれは眞實の自己を知るより來る。換言すれば自己の生命を先方の中に見出すことだ。尙言換れば愛は自ら愛するもの、方へと流れる。其の時自己の身命も其の爲めならば屠するに至る。私たちは金錢を愛し、肉体も愛する、乍然自己そのもの、眞の生命はそれだけで永劫に満足し得るものではない。故に眞實に目醒ざむれば、ついに更にそれよりも大なる眞生の世界を求むる。而してそには何にも換へられぬ永生の欲求がある。而して其の永生が更に無限の向上となる。我等が金錢を永遠に愛し、肉慾のみを愛するもの、つまりは此の眞實に氣づかない爲めである、故に眞我の生命を眞に知る時は一切の財慾も肉慾も悉く此の爲めに捨てられる。否むしろ此の財と肉との一切は此のもの、完成の理由とこそなるのである。而して此の自覺の生活が即ち永生の自覺となり、無限向上の價値の實現として一切の上に働くに至る。而して此の働きが即ち萬有に對する至愛の道徳となつて來るのである。故に至愛の本源を知ること此の眞我の生活を見出すにある。

然は其の眞我の生活とは何である。之はこそは眞に私の言はんとする宗教の生活である。人は何よりも先づ自己を愛する、従つて自己の生命を愛し、自己の向上を喜ぶ、而て自己を亡ぼし自己を害するものを心より嫌ふに至る。従て一切の行爲は自己より始まる。自己を外にしては一切がない、而て眞實の

自己とは即ち永生の自己である、無限の向上とは即ち價値の生活である。然ば眞實の自己とは何ぞ、而して如何に生きることが即ち價値の生活であるか、自己の本源價値の生活とは何ぞ、斯くの如く考へて靜に自己と宇宙との關係を見る。そこには宇宙の本源と自己自身の本源とが如來を中心として一となる。一切は如來を中心として現はれ、一切は如來を中心として歸る。そこに萬法と自己とは如來を中心として一である。從て宇宙の本源と自己の本源とは別でない。言換すれば自己の生命と宇宙の生命とは一切の生命と宇宙の生命とである。差別的に見れば萬有に生命あり、されど總體的にいへば萬有は宇宙生命の顯はれである。故に宇宙の生命を外にして萬有の生命なく、萬有の生命を外にして宇宙の生命はない。宇宙の生命とそれより現はれた萬有の生命とは別ではない、故に宇宙の生命と萬有の生命とは一である。從て一が一切であり一切が一である。そこには君民も一体となり。親子も不二となる。夫婦も兄弟も亦一体である。而て其の全一の生命が如來であり、神である。從て我等と一切とはそれより現はれそれより來る。如來は我等の本源である。そこには無限大悲の慈愛が流れる、從て如來の眞の喜びは直に自己の喜びとなり、如來の眞の悲しみは直に自己の悲しみとなる。それが即ち宗教の心である。而して此の心より起るものがそれが即ち至愛の道德である。せずにはおれない道である。從て全体が一であり一が又全体である、故に之を全一の生活と云ふ。全一の生活は即ち神の生活である。佛としての生活である。如來の外に自己もなく亦一切もない、神と自己とは一体であり、佛と自己とは同體である。神の外に我なく、我の外に神なしである。それが全一の生活である。月を見て月に心の住むときは月こそ己が姿なるらむの故上人の御言葉も斯の心より外にはない。(二、一九)

懺悔錄

(三七)

演阿彌

凡てと一なる如來様よ。而して其一なる中には數多の「一」なる独自の世界が有つて、皆夫々全宇宙の上に中心となり主となり師となり親となつて然も更に夫が實際運動と顯現しては、夫々自利利他を行じつゝ、他の個々の独自の世界を尊重し合つて行く實に主伴相即の不可思議諸佛世界を出現して居るのであります。夫は唯だ私達人間の世界斗りでなく、一切の無生物の上にも亦た夫々独自の世界を顯現して居る處、實に驚く可き廣大なる不可思議世界ではありませんか。今私達は此不可思議世界の王として一切を統攝し一切を飯越せしめつゝ、有る、摩訶毘盧遮那にして盧舍那なる絶大無邊無碍なる如來様を發見し得たと云ふ事は、實に驚く可き不思議でありますと共に、又た實に大なる喜びで有つたのであります。然るに其大なる喜びに添ふ可き報恩行であり而して又た自他の上に於ける唯一の價値行たる度生の願行を強めて行か

ないと云ふ事は、本當に悲しむ可き悔恨事では有りませぬまいか。私達は渾身の勇を奮つて諸共に其價値行をのみ貫いて行きたいと望まざるを得ませぬ。然し乍ら現在のザインから其ゾレンへの此願行が、柳は柳の儘に花は花の儘に最高の能率を顯示し得可く如何に有り得可きか。是れ誠に重大問題であります。私達の生命は實に有限であります。然も私達の理想は無限に最高の價値を體現せんとして居ります。此處に私達の熱心なる考慮が有らねばなりません。噫々如來様よ。私はあなたを御旨を顯はす可く如何したらよいでせうか。或人は云ふでせう。「眞實に如來の大慈悲を知り得たならば如何したらなど考へる迄もなく直に夫を實行に顯はせばよい」と。本當に御尤も千萬であります。誰人か三業四威儀に我が意志する處を現はさず居りませうか。然し乍ら事實は誰かいやが上にも高きを欲し其効果の益々大なる願はざる者がありませう。「問題が解決して居ないのだから多分何にもしては居ないのだらう」と思ふならば其人こそ單なる概念所有者であつて口斗

りの人間なのです。私達は現在爲しつゝある仕事以上にもつと高きを欲し善きを欲して居るので何處迄も向上の一路を忘れて居る者でないから、此一事が常に念頭を離れないのであります。また全く廣大なる如來様の大慈悲は三賢十聖の大菩薩も雖も其涯底を窮める事は出来ないとも云はれてある位で、私達凡夫に中々其奥底迄もと云ふのはよし夫が私達の理想ではあつても、中々尋常では其域に達せられず又は實には夫を達成す可くかくの如く専心念願もして居るので其處に眞實の向上が輝くのだと思つて居ります。如來様の聖旨は凡ての者をして各々夫々の獨自の世界に奮ひ立たしむ可く照してましますのですから、其聖業に參加せんとする事は私達の大きな特權であると共にならざる喜びであり大なる望みである事は云はずもがな。の事でありまします。今ま私はソウした根本理論を問題にして居るのではありません。其中心信念を根底として日常の生活を更に更に價值あらしむべく何が一番現在に適しつゝあるか、云ひ換へれば將來にさらに價值を大ならしむべく如何に現在の

で、もう二つ位で終点にならうとする頃、フト耳の傍で「各戸の佛櫃を掃除して念佛回向せよ。然らば汝が念願の一端は契へられん」と云ふ様な聲が聞えました。「さうだ。夫がいい。おう尊しや如來様はなやめる者を救つて下さるのです。」さう思ふと本當に重い荷を取られた様な輕安を感じざるを得ませんでした。私は元來口は不調法で言はでもよい事を云つたり、言はなければならぬ事を言はなかつたり其上咄辨でとても口業を完全にする事が出来ない質であります。さればと云つて外に方法もありませんから、せめては身業に依つて出来るだけ私達の周圍を淨化して行きたいと思つても居りますが、さて其方法はと云ふと行詰まらざるを得ませんのです。随分缺點の多い私自己改造に努力しやうと思つても耳四郎の心理と一般、中々に難事業であります。どうしたら自分が改造せられ、一切が成就せられて行くでありますか。思へば本當に遺瀨なさに感にせまられます。此時に當つて此ヒントの與へられた事は全く大早に雲霓を望む様な感であつたのです。かうした事

自身を處置すべきかと云ふ事を念じて居るのであります。更に約言するならば鬱積せる宗教意識を如何に長養せしめ如何に爆發せしむべきかに就ての問題なのであります。私達否私自身が現になしつゝある事の以外に何をなしたなら最も有効に如來様の第一義が宣揚せらるゝのでありませうか。如何にしたなら如來様の第一義が多くの人達の生活指導原理として大なる叅明を爲し行くのでありませうか。本當に此事斗りが思はれてならないのであります。人には得手不得手があります。其不得手のものより得手のものに於て如來様の御旨を顯はさなくては本當に自らの本心に満足するものでありません。然し乍ら我が得手なるものが判然して居ない場合に誰人か之を求め深さずに居られませうか。或日の事でありました。或る要件の爲めにS市に行かうと思つて電車に乗りました。夫は約四十分位の時間を要します。いつもの様に「噫。如來様！。私は何をしたらよいのでせうか。噫。如來様よ。私は何をしたらよいのでせうか。」と繰返し繰返し祈つて居りました。三拾五分斗りも過ぎ

が理想的事業だとは思つても居りませんが、現在に於ては最も私に契つて居る仕事かも知れないのであります。縁有る人々の内佛に詣うで、將來に唯一人丈でもよいから眞劍な信者を出して頂ける様に其家の祖先なり本尊なりに祈ると云ふ事は兎に角私の現在に於ては價值の少ない行爲だとは思はれないのであります。然し此處に注意しなければならぬ事は世俗の習慣として、かゝる行爲に對して物質的返禮をしたがる事であり、而して受けなければならぬ破目になり勝な事でありまします。精神的獲物を遠き將來に期して居るのに、物質を以て二一天作の五とやられては本當につまらないのですから、此點に關しては殊に注意を拂つたのであります。私自身に取つては其行夫自身が直に本心の満足をしつゝあると共に將來に於ける大なる社會淨化の素地をかち得るものと確信するので其處に大きな價值を認めて居るのですから單なる物質的報酬に依つて割引されては千載の恨事であると思ふのであります。かくて愈々初めたのが大正十年九月十日でした。其日の記録を見ると

午前障る事ありて午後より行く。自ら望みし願行なるに勇む心なきは如何。快心の行爲なるに愉快ならざるは如何なぞ考へつゝ歩み行く。始むれば尊き心も起き、如來様に全身を捧げまつらんの強き心も度々起りて陶々然たる靈感さへ覺えぬ。十四軒にて夕刻となりしかば飯る。但し今日の精神意識を驗するに未だ全く豫期せらるる如き心境に到り得ず、知見暗々として透明ならず、本心の満足何れの日にかあらん。悲まる。噫々我如來様よ、我にみめぐみを給へ。我に御惠を給へ。然し精細に反省すればかゝる中に根本的な而して然もデリケートな自利思想が何處迄も根強く喰ひ入つて離れて居ない事を見ない譯には行きません。かうした根本的欲は實は人間から取り去る事が出来ないのではないかとさへ思はれました。而して更に又た行爲は意志の決定に依つて起り、意志は何等かの目的を必然的に具有してゐるので、其行爲のあなたにいつも期待が概念を構成しつゝ、而かも事實は豫想に反する場合が多いので本心の満足は終に永遠に私を見舞ないのではないかと

お念佛よ！ (二)

山口常照

お——交換的念佛よ！
生けらば念佛の功を積み
死なば浄土へ参りなん
兎角念佛は蓄積する事だときめ込んで
日課三百遍！千遍！一萬遍！
積んで積んで蓄へて
極樂の門で引換せんと
とんでもない了見違してからに
積むは積むは山の様
さはさりながらその山は
實らぬ米のみみ穀念佛
消化せざる糞つまりの念佛
これぞ交換的蓄積念佛
お——絶対他力の念佛よ！
一切のはからひを捨てよ
浄土宗の様に勢出して念佛申すと自力となる

思はれてなりません。其上やればやつたで色々弊害も起りして、中々思ふ様に行かないものであります。尤も思ふ様に行かない生活事實を兎にも角にも切り抜けて絶対解脱の境界ならしめんとする處に宗教生活の第一歩が初まるのであらふし、又た向上の一路も其處に永遠の輝きを示めして居るのでありませう。其事が直に私達への大きな恩惠的贈り物ではあります。感情の上からは全く困まつて仕舞ふ事が澤山に續出するのであります。毎月一回宛三百斗りの家を廻る事はかなり努力を要する事であり且つ障る事もあつて大正十二年の八月迄約二年間斗りしか續けませんが、其間にはいろ／＼尊い經驗もあり、かなり微細な心理的修養もありまして、ごの位私を利益し長養して呉れたか判らないのであります。之に就ては色々申上て見たい事も数々ありますけれども左程重大な事でもないから、よす事に致します。尙此事は或故障の爲に一時中止の姿ではあります。尙は或る時期を見て續けて行きたいと思つて居ります(續)

邊地懈慢の往生となるぞよ
如來のはからひに任せよ
其身其儘其機のなりで御助け
廣大な御慈悲様！有難う御座います
ナンマードー！夏節の流れる様に
たゞ如來様のからくりとなればよい
如來様のあやつり給ふまゝに
個性に覺めてもならず自覺してもならず
此の泥凡夫が自覺だの醒めるのと生意氣だ
親様の心も知らんもんだ
信の一念に救はる
あやつり人形になつて居ればよいのだ
凡ては如來のはからひおさしづ
ものぐさ太郎式にやる
有難う御座います廣大な御慈悲様
ナンマードー！
これぞ絶対他力の念佛よ
お——變態的幻影追求念佛
眞實に生きる要求もなくて
人が佛様を見たといふ

如來様の光明に照らされたといふ

佛様や光明を拜みたいと

幻覺や錯覺の佛を要求して念佛する

佛の手を拜んだの足を見たのといふ

そして見佛したと騒ぐ

體驗の念佛だと誤る

法然上人も三昧發得記にそんな記事がある

辨榮上人にもそんな實驗はあつた

しかしそれが宗教の目的ではない

不求自得の神秘にして、念佛修道の餘興だ

法然上人はかるが故に

「近來の行人觀法をなす勿れ……」

深く本願を頼みて

一向に名號を唱ふべし」と

お——肥料的念佛

近代的いくらかさめた念佛よ

禪は靜中の靜で甚だ困難だ

念佛は動中の靜で理想的だ

修養上非常に爲になる

木魚たゝいて念佛申すと

恠好な人間は念佛をだしにして

自己の私腹をこやす

無自覺な宗教家は悪用されながら

世人が漸く宗教に醒めて來たと喜ぶ

いくらかの御禮金を貰つて!

お——虚假不實の念佛より眞實至誠の念佛へ!

お前はまだく迷妄の裡に隠れて居る

上に述べし念佛は

變態虚假の念佛よ!

そは一時的自力不自然の

束縛寄生の念佛よ!

しかしお前は偉い

如何に誤解せられても

如何に曲解せられても

如何に悪用せられても

如何にだしに使はれても

お前の眞實は少しも汚されない

念佛の本質には些少の變化もない

塵埃の中に埋れても

自己を汚さないところに さがあ

精神統一が出来て

精神修養には最高の方法だ

念佛申す様になつたら

酒も煙草もいやになつた

念佛は有難い

念佛申す様になつたら

無慾恬憺になつて常に光風霽月だ

家庭は圓滿になる

腹が立たなくなる

云ひたい事も我慢する

店員の精神修養になつて

事務に忠實に仕事の能率があがつて來て

念佛は矢張り尊い

宗教は人生に必要だ

こゝろいふ功能のあるものを

迷妄の世人は何故信せざるか

勞資協調も權力では收まりつかん

矢張り宗教が必要だ

宗教が勞資協調の道具に

地主對小作の協調の道具に

しかし尊きものはいつかは世に出る

いでや正態眞實の念佛よ!

他力自然の

獨立自由の念佛よ?

光明輝く時が來る

他山の石ながら綱島梁川は云つた

「南無阿彌陀佛の聲をして

無限の感謝法悅たらめよ

無限の活動健闘たらしめよ

一切人生活動の最深原理たらしめよ

さるにても無南阿彌陀佛の徒らに

心細き後生だのみの佛いちりの

一器具觀をなせるや久しい哉

今は須く

其本來の眞精神を高揚して

一代の人心を照すべき秋に非ずや?」

塵埃の中より光は見えそめる

さへられぬ光もあるをおしなべて

へだてがほなるあさがすみかな(續く)

宗教座談(四)

藤井貞邦記

長「世には何等の体験もなくして祖師の宗教を説くものがありますがあれでもよいのでせうか。

上「それは大なる誤りです、一体自己の體驗なくしてどうして祖師の宗教が語られませう。凡そ何事でも自分の力以上にはどんなに力んでも説くことはできぬものです、それを自分には何等の体験もなくして、宗祖はかうだ、辨榮はかうだ、見佛はかうだと説く人がありますが、笑ふ可き事です。涅槃を得ざるものに涅槃の説明ができるでせうか、近頃光明主義者など、云ふ人の中にも時々こんなふうの人を見ることがありますが、聞く人も聴く人ですが説く人も説く人です。辨榮上人も嗚々御迷惑でせうよ。或る人が私に辨榮上人がかういはれているのあ、云はれているのと、いかに私を教へるかの様な口調で言はれるのでさういふことはよろしく上人について聞くべしである。アナタの体験そのものが聞きたいといつたら私に

の人格的態度といふものです。故に私はそんな人々に對しては言つてやりたい、何ぞ汝は人に言ふことを止めて自らに道を求めざる、暫く宗教の信仰など語ることを止めて、汝自身の体験に之を求めむべし。体験なきものは語るべからず。然ざれば汝自身に罪を造り又人をして眞に其の道を誤まらしむるであらう。

×「さうなると信仰なきものは語るべからずです、又さうなると何だか宗教の話などすることは大へんにむづかしくなるやうですが。

上「いや、さういふ意味ではありません、信仰なきものは信仰なきまゝを語つたらよいでせう。そして共々に其の人と道を求むべく眞劍であればよいのです、又信仰の話といふものは各々其の信仰の程度といふものがありますから、其の信仰の程度に従つて自由に語ればよいのです、從て今私の言ふ意味は何等の宗教的体験もない人が他人の宗教のこのみあれこれとさわぐのをいつたに過ぎないのです。未だ大學教授ほど學力なくとも小學教師たることはできる如く、未だ完全なる佛た

一四

は何等の体験もありません。だから辨榮上人の体験を語るのですといはれたと言ふ話を聞きました。自分が何等の体験なきものが人の体験がどうして解りませう。だから私は私について道を求むる心なら、よろしく私の言葉について聴くべしと云つてやつたことがあります。然に世には何等の体験もなく又自己に体験を求むるでもなく、法然上人や辨榮上人の法語の説明のみを盲目的に説く人があります、そして言う一字一句不可加減だと、そして然ば君の体験はときくと私には何等の体験もありませんと、何といふ卑窟なやり方でせう。こんなものが所謂世のお手づきといふものでせうか、全く盲人の手引きです、だからそんな人に限つて又きつと一字一句不可加減など善導の言葉をまねるので、そして曰く、偏依辨榮上人だど凡そ佛教には佛教の眞隨がある然に未だ佛教の眞隨に觸れずしてどうして眞に佛教を語る事ができませう。されば体験なきものはひとへに体験を求むべきです、そうして其自己の体験に相應して眞にそのことを語るといふことが即ち宗教者

らずとも應分の宗教、体験はありうるものです、故にとこまでも自己の体験を中心として其の眞實を語るべしといつたに過ぎませぬ。

×「信仰を得た力はどんな力でせうか。

上「私は我に一人の信者あり、そはかくいふ我これなりと嘗て入信當時の日記に書いて居ります。それこそ實にまたなき人生の力です。それこそ絶待の眞理であります。だから其頃私の説に共鳴するものがなく、寂しいことは寂しかつたが、絶望ではありませんでした。此の宏大無邊の宇宙の中にも己に自分と云ふ一人の信者がある。然らば私と同じ境遇にあつたものは必ずいつか又共鳴するに違ひない。今此處に自分が出たといふことはまぎれもない宇宙唯一の眞理であると思はれた時そこに謂知れぬ無限の力を感しました。そして又此の眞理は實に單なる私一人の發見でなく法然上人や釋尊自身の体験でもある事を知るに至つては正に絶大の權威であります。ですから信仰は人眞似ではありませぬ。實に自己體驗の結果であり先覺と一味の覺りであります。昔は私も「法然上人の

教を蒙りて」と言ふ風の時もありましたが、今はそんな表現では満足ができぬようになりました。少くとも各人各位の上に眞實宗教の體驗でなくてはならぬのであります。

長「自分は他人との距離がだん／＼遠くなつて行く様に感じますがどうしたものでせう。

上「個性といふ點から云うならば即いて居ても離れて居ります。一本の毛の末と元とでさへ別ですもの、それだけ見ると皆寂しいのです。けれども人々各異つて居るといふ事は各部分に於ける本質を現はす爲のものとせう。かくて全體として調和があり美しい眺めともなるのです。別々だといふ方面からいへば細君でも窺ひ知ることの出来ぬ處があり自分で自分が自由にならぬ寂しさがあります。しかしよく考へて見れば人々別々だからお互に自覺したり、自覺させたり、助けたり、助けられたりして爲す事に樂みがあるのです。あなたが初めから消極的に出たからさうなつたのです。そこを根底から破らねば眞に生きられません。彌陀を念ずるといふ事は己の本源を念じ又各人各自の

か。他人との關係も亦觸じです。たゞできる丈よいと思つたことをその人の爲めにやればよいのです。やりさへすれば必ずそこには何等かの道はひられます。實にかう云ふ私もごちらかといへば。あなたに似てゐますが、それも念佛して自分の心にくもりのないやうにさへしておけば、一切はその時其の時の自然にまかせて心の行くまゝにやるばかりです。天地は一體であり、萬物は同根である。そこには一切が一佛一體であるのです。何事も思い切てやるに限ります。そう人はいつまでもへだてるものではありません。人がへだてると思ふのはそれだけ自分が其人をへだてゝゐるからです。だから何事も自ら是なりと信じたらやることです。そして一切を自らにへだてぬことです。例へば子供の方では親をへだてゝも親の方では其の子をへだてぬが親の心でせう。如來は即ちそれなのです。故に自分たちは自づと一切を如來に任かせて此のへだて心をとつていただいて、そしてその心で一切に接したらよいでせう。そこに念佛の必要もあるのです。

本質を念ずるのでこれは又個々が一體となる事を念ずる事でもあるのです。しかし、それが完全に行かぬから益々彌陀を念ずるのです。又他人の深切をむやみに辭退してはならないのです。中には尻込みする卑怯者さへあります。親切にされる自分よりも、親切にして呉れる他人の仕合はせを葬つてはなりません。そこにも自己の體驗が必要で

長「ではどうしたらよいのでせうか。すべてに對する私共の態度は？

上「何事もよいことと思つたら、思いきつてやることです。そして若し悪いところがあつたら又やりなほせばよいのですよ、何事でもやるにかぎります。世の中にも案ずるより産むが安いといふことがありますね、あのへんのところを考へると確にものはやつて見るに限るのです。そしてそこには私共が完全でない限り、必ずいくらかの欠點はあるにきまつてゐます。けれどもそれを恐れてやらなかつたら、少しの失敗もないかはり、又そこには寸毫の成功もない事になるではありません

第五目

靈性の休息に

上「之を順本に考へて考へたらよいでせう。個人の佛性が如來の高きに至らんと願ふのは佛性の本源が如來と一體であるからです。もし地下水の湧つて居る處が案がる、噴出せぬ様に如來縁との關係が案がると向上心が起つて來ないのです。念佛はこの道をつける方法です。かくて宇宙の力が吾人を通して居るので、そこから驚くべき力となるのです。一體自分の力だけで修養するが如きは實に困難な事柄です。又できるものでもありません。私以前にはフランクリンに依つて十三徳の表を作つて修養に努めて見ましたがどう／＼行詰つて仕舞つたのです。もとより修養といふのですから苦難に堪へるをつけるのではあります。何をしてそれが具體的に形を取つて現はれると必或欠點が佛性なのです。しかし今から思へばそれが當然なものでした。定をでない自分が自分でやる事でも欠點の多いのは當然です。だから欠點よりも長

所の方が多かつたら、それをやる
 處までも、そしてそれは如來を中心
 として全員の理想の上に自分を置
 いて自らをなかりと信ずることは一
 切をがまはず直に實行することだ
 す。そこへ行くと學校の修身なん
 ていふものは末だいたらの事の多
 きを感じます。そんな事では皆人
 間を小さくする方法で結局品行の

満點の生徒は何も出來ぬといふ人
 物なんです人間は荒削りで大きく
 出來なくてはならないと思ひます
 そこに絶對無限の如來を中心とす
 る眞人の生活があるのです。宗教
 を離れたる人類の修養は遠大なる
 眞の理想がありません。それでは
 人物が小さくて、とても眞實の自
 由は開けるものではありません。

かく言ふ私も實は何事にも力の窮
 い人間であります。かうした如
 來の御方に生きる時吾々が天地を
 貫く眞人の生活を感じるのです。

寄贈並ニ誌代拂込芳名

- 寄贈の部 金拾圓也中村祥作様
- 關浦恒子様 金拾圓也高井宗
- 官誌代り部 金拾圓也浦賀久里様
- 濱正業寺様 金參圓也田山法
- 全五井とよ様 金貳圓也中山兵
- 産様 全金澤高運様、全三六兵
- 全木下市松様、全増本安藏様、全
- 瀧岡せい様、全徳永アイ様、全
- 名町十念寺様、全宮島俊定様、全
- 村光様 全野

行基寺念佛三昧會

一、時 四月十一日より全一週間
 一、所 大垣養老線乗換にて山崎驛下
 車行基寺
 一、導師 土屋 觀 道 師
 一、 怡もよし。櫻花、月明の頃。心を清め
 て眞に生きんとする道友の集りを求む

行基寺

認定未納の方々
 何卒振替口座へ御
 拂込のほどを眞生
 も金なくては立ち
 さうもありません
 眞生社
 同人

定価一部十錢 半年六十錢 一年 圓
 東京市芝區芝公園第十四號地九番
 編輯兼 土屋 觀 道
 發行所 眞 生 社
 印刷人 三 井 清 次
 東京市芝區三田四國町二番三號